世田谷村日記

石山修武

十一月二十九日

九時半世田谷村発。十時調布駅南口。八大建設西山社長と落合う。十時十五分高山さんの家、点検。高山さんはファン・ワークスというという会社を自分でおこして、活動を始めている。ファン・ワークスの会社概要などをきく。面白い仕事である。十四時過、弁当買って研究室で昼食。十六時α社長若松氏娘さんと来室。十七時前橋の大工さん市根井さん来室。新作の椅子を見せてもらう。市根井さんの仕事振りのペースは仲々見事だ。彼の住宅も良いモノになっている。GA杉田君に連絡。新しい世代の大工が工夫しながら作った生活の器である。十八時半皆去る。ドッと疲れが出て、しばしボーッと無為の時間を過す。我孫子の馬場昭道より「室内」連載、面白いと電話が今朝入った。私のHPの連載コラムも段々面白くなっているのに、こちらも、面白いとか言ってくれ。しかし、まだ充分に面白くはないのだろう。横浜トリエンナーレに関しての感想は我ながら面白くかけているのだが、丹羽編集長のスピード感にずれがある。二十二時世田谷村に戻り、フィンランドの連中とコンタクト。二十二時半、マティアスよりTEL。明日は彼等は余りにも早発ちで会えぬ。

十一月三〇日

十時前まで眠りこける。午前中は世田谷村で21世紀農村計画のプログラム作り。十四時研究室。幾つか打合わせ。二〇時四〇分迄。二十一時前近江屋ミーティング。渡辺が急速に育ってきている気配あり。数少ない希望か。十数年前大学に来て、幾たりかの人材を得たような気分はあるが、しっかりした手応えはまだない。建築よりも人間は、はるかに複雑であるから。モノ（作品）を残すのを価値とするか、人材を残すのを大きな価値とするか、普通に考えれば、人間に決まっているだろうが、残念なのは人間は人間を作品として創る事は不可能である事だろうか。宗教家、特に日本型の禅の世界では師たる者、弟子に面授、教伝するのは一つの定理であるらしいのだが、大学教育という極めて俗な大衆的世界ではそんな事は常識的にはあり得ないだろう。しかし、何とか面授の法に乗取って、キチンとした弟子を持ちたいとは願う。それが研究室内に居ようとも、木本君のように外に居ようとも、どちらでも良いのだ。粘土をこねて作品をつくるように人間の気持だって作ってみたいのだ。異常な夢であるのは自覚しているのだが、大学に来てしまったうえには、それが出来なければ生きてる意味の半分は無い。又もや考え過ぎだナァ、これは明らかに。

今日で十一月は終わってしまった。俗な言い方ではあるが、時は風の如くに流れてゆく。何もしない、出来ないママに時間は流れてゆくばかりだ。明日から違う世界を書けるようにしたい、とここ数年思い続けている、ばかりなのである。誠に残念、きわまる。